

伝統と修行く慈恩会（じおんね）

令和五年十一月法話 薬師寺管主 加藤朝胤

法相宗祖慈恩大師窺基（太宗 貞観六年く高宗 永淳元年 六三二く六八二）は、唐の貞観二十二年十七歳で玄奘三蔵の弟子となり、法相、唯識教学の祖と仰がれた。永淳元年（六八二）十一月十三日、慈恩寺翻經院において五十一歳で遷化された。

慈恩会は宗祖慈恩大師の御忌会である。慈恩大師の御命日に遺徳を偲んで報恩謝徳と研学の増進の意を表して供養する法会である。慈恩会は大師の遺影を祀り御前で衆僧の日頃の学業成果を披瀝するもので、「論義」という問答形式で議論する法会を催す。慈恩会を初めて厳修したのは、興福寺においては天曆五年（九五二）十一月十三日（南都七大寺巡礼記）、薬師寺においては康平四年（一〇六一）、法隆寺では建保四年（一一二六）に始行された。また天元四年（九八一）に慈恩会に堅義の制が設けられた。堅義とは教学の口頭試問で、寺僧は堅義の成満によって学徳兼備を目指したもので、ここにおいて慈恩会が寺中に確固たる地位を占め堅義が重視されるに至った。

慈恩会は明治初期に廃絶したが、その後明治二十九年十一月十三日法隆寺大講堂で法相宗宗会として執行され復興した。現在は、会場を薬師寺と興福寺の法相宗二大本山の持ち回りとし、毎年両寺衆僧の出仕によって厳修されている。

令和五年は興福寺を会場として厳修される。

慈恩会法要の次第は、論義の形式による。

- 一、入道場 式衆の入堂
- 一、惣禮 三回の禮拜をする
- 一、講読入堂 講師・読師登高座・大衆着座
- 一、唄 四箇法要で佛徳を讃え勝鬘經の偈頌を節を付けて唱える
- 一、散華 弥勒の偈頌を唱えながら花をまき佛を供養し会場を莊嚴する
- 一、梵音 清浄な音声で佛法僧の三宝を讃嘆し供養する偈頌を唱える
- 一、錫杖 錫杖は環の付いた杖で、偈頌を唱えた後振り鳴らし悪を退散させる
- 一、表白 講師により法要の趣旨を述べる
- 一、神分 佛法を守護する諸神、特に法相擁護である春日明神の來臨影向を請願する
- 一、勸請 佛・菩薩にその道場へ降臨することを請願する
- 一、經釈 教典（『觀弥勒菩薩上生兜率天經』『成唯識論』）の概要について説明する

- 一、揚經題 あらためて經典の題を読師に問う
- 一、講問 講師と問者との論議が開始される
- 一、講ろうし 講師・読師下高座
- 一、読經 般若心經・唯識三十頌を讀頌する
- 一、番論議 浅藹者の幼い稚児僧による問答で『唯識論同学鈔』から選定される
- 一、堅義 学僧の実力を試験するもので、これを経たものは講師や読師の資格が与えられる
- 一、惣禮 三回の禮拜をする
- 一、退道場 式衆の退堂

講問は會問が講師に論議の嚆矢を放つ。この論議は『唯識同学抄鈔』の中で問答されている「唯識比量」と「上生經は大乗經なりや」の二題を重ねて論議するので（重ね論議）という。

唯識論に安慧、護法等による旧釈と玄奘遍覺三蔵、慈恩大師による新釈の見解の差異を論ずる唯識比量の論題と、『觀弥勒菩薩上生兜率天經』は大乗經に入るや否やを論ずる論題である。

本年は堅義が執行されるが、その場合は番論議に引き続き行われる。



慈恩大師画像（平安時代）薬師寺蔵

會問

唯識比量、大乘經

講讚論中

問遍覺三藏對小乘外道為成唯識義五量云真故極成色不礙於眼識自許初三攝眼所不攝故猶如眼識云々可云正比量之耶論中付說教利生相且上生經可云大乘經也耶

答

論中付說教利生相且上生經可云大乘經也耶

講讚論中遍覺三藏對小乘

外道為成唯識義五量云

真故極成色不礙於眼識

自許初三攝眼所不攝故猶

如眼識云々可云正比量耶

之正比量也可答申也

サテ彼是

之大乘經也可答申也

問

之大乘經也可答申也御答付有疑

サテ彼是正比量也可答申也御答付有疑

付之大乘宗以即識為勝義小乘意以離識為勝義即離之義差互五敵勝義不極成故有法色既不共許豈無所別不成失耶彼清弁所立真性有為空比量五敵真性不共許故定有此失三藏今量豈不然御答有疑サテ彼是付之正披經文又阿逸多具凡夫身未斷所漏此文小乘經見此文小乘經見答申也

答

付之正披經文又阿逸多具凡

夫身未斷所漏此文小乘經見

サテ彼是

付之大乘宗以即識為勝義

小乘意以離識為勝義

即離之義差互五敵勝義

不極成故有法色既不共許

豈無所別不成失耶

彼清弁所立真性有為空

比量五敵真性不共許故

定有此失三藏今量豈

不然

